Sub TitlePoetics of Juan José Saer : through the intertextuality with Dante in GlosaAuthor浜田, 和範(Hamada, Kazunori)Publisher慶應義塾大学Publication year2022Jittle学事振興資金研究成果実績報告書 (2021.)JaLC DOIAdstractAbstract本研究は、アルゼンチンの作家フアン・ホセ・サエール(1937-2005)の代表作『グロサ』(1986) におけるダンテとの間テクスト性を通じて、作家自身の創作原理の一端を明らかにするものである。遂行にあたっては作家本人、ならびにアルゼンチン文学 / ラテンアメリカ文学さらには人文学一般に関する研究文献を入手して草稿レベルからの作家研究および作品分析を行い、その成果を第4 2 回ラテンアメリカ学会定期大会にて個人発表「フアン・ホセ・サエール『グロサ』」におけるダンテの存在」として発表した。発表の概要は以下の通りである。 『グロサ』においては古典から現代に至るさまざまな作家との間テクスト性が見られるが、ダンテとのそれは詳細に顧みられてこなかった。とはいえ作家が書いた三篇の詩「ダンテ」において観察しうる特徴、特に三人での散歩という要素は『グロサ』と重なるものであり、また小説終結部の虚無的な宇宙観が『天国篇』への対抗として書かれているのみならず、未来の破局から現在を照射するその構成は比喩形象的リアリズム(アウエルバッハ)を逆向きの形で見現化している。 。そのようなアイロニカルな間テクスト性を通じることで、『グロサ』に観察されることを立証した。 上の報告に基づいた学術論文をスペイン語にて執筆し、現在投稿先を探している。また副産物として、『グロサ』に観察されることを立証した。 上の報告に基づいた学術論文をスペイン語にて執筆し、現在投稿先を探している。また副産物として、『グロサ』 日本語訳の準備を進め、こちらは2022年刊行予定となっている。 This research aims to clarify the principle of the creation of the Argentine writer Juan José Saer (1937-2005), through the intertextuality between his masterpiece Glosa (1986) and Dante. To accomplish the purpose, I obtained several materials on the author, Argentine or Latin American		or y of Academic resources				
Author         浜田, 和範(Hamada, Kazunori)           Publisher         慶應義聖大学           Publication year         2022           Jutic         学事源更資金研究成果実練報告書(2021.)           Jatc DOI         本研究は、アルゼンチンの作家フアン・ホセ・サエール(1937-2005)の代表作『グロサ』(198 6)におけるダンテとの間テクスト性を通じて、作家自身の創作厚理の一端を明らかにするもので ある。送行にあたっては作家本人、ならびにアルゼンチン文学/ラアンアメリカ文学さらには人 文学ーがに関する研究文献を入まして準積レルからの作家研究状をがたした。の人からの作家研究かよび作品があだらい、その成 果を第42回ラテンアメリカ学会定期大会にて個人発表「フアン・ホセ・サエール『グロサ』」 におけるダンテの存在」として発表した。発表の概要は以下の通りである。 『グロサ』においては古典から現代に至るさまざまな作家との間テクスト性が見られるが、ダン テとのそれは詳細に開みられてこなかった。とはいえ作家が意いた三濃画詩『ダンテ」こたおいて 観察しうる特徴、代に三人での散歩という要集は『グロサ』と重なるものであり、また小説妹結 部の虚無的な宇宙観が『天国篇』への対抗として書かれているのみならず、未不の破局から現在 を照射するその構成は比喩形象的リアリズム(アクコルバッハ)を逆向きの形で具現化している 。そのようなアイロニカルな間テクスト性を通じることで、「グロサ」における瞬間的なエピフ アニーが明らかになる。特にその記述に隣接する埋み次のイメージは、ダンテの火とは異なるサ エーノが組の形象へと見撃されており、メンラコリーの虚側のな宇宙を原動力に巻く 展開する生の営みとしての語り、というサエール時学の核心が『グロサ』に観察されることを立 証した。 たの報告に基づいた学術論文をスペイン語にて執筆し、現在投稿先を探している。また副産物と して、『グロサ』日本語説の準備を進め、こちらは2022年刊行予定となっている。 、市路 research aims to clarify the principle of the creation of the Argentime viter Juan José Saer (1937-2005), through the intertxuality between his masterpice Glosa (1986) and Dante. To accomplish the purpose, I obtained several materials on the Argentime or Lian American liferature or Humanities in general, and tried a genetic approach as well as an analysis of the novel itself. The result of the investigation was published as an academic paper titled "The Presence of Dante in Juan José Saer's Glosa", read at the 42nd Congress of Japan Association for Latin American Studies (JALAS). Its outline is as follows: Glosa has intertextualities with various writers from Ancient Times to Modern times, but the one with Dante has not been analyzed in detal. Nevertheless, the three poems writing baser and compliated under the title Dante', have some elements in common with Glosa -especially a promenade by three characters.	Title	フアン・ホセ・サエールの詩学:『グロサ』におけるダンテとの間テクスト性を通して				
Publisher         慶應製型大学           Publication year         2022           Jattle         学事振興遺金研究成果実練報告書 (2021.)           JaLC DOI         Abstract           Abstract         AF研究は、アルゼンチンの間テクスト性を通じて、作家自身の創作原理の一端を明らかにするものである。途行にあたっては作家本人、ならびにアルゼンチン文学/ラテンアメリカ文学さらには人 文学・#に関する研究文蔵を入手して増し、ベルからの作家研究会社で加ジランダ*/ラテンアメリカ文学さらには人 文学・#に関する研究文蔵を入手して登場しベルからの作家研究れた「ホナ・サール」「ブロナ」 におけるダンテンの前子・シスリカ学会に算機しベルからの作家研究れた「ホナ・サンドブロナ」 におけるダンテク病在」として発表した。発表の概要は以下の通りである。 「プロサ」においては古典から現代に至るさまざまな作家との間テクスト性が見られるが、ダン アとの方々れは詳細にあられてこなかった。とはいえ作家が習いた三篇の時「ダンテ」において 観察しろる特徴、特に三人での散歩という要素は「グロサ」と重なるものであり、また小散発結 節の虚無的な宇宙観が「天国篇」への対抗として書かれているのみならず、未不の破局から現在 を照射するその構成は比喩形象的リアリズム(アウエルバソハ)と逆向きの形で見現化している 。そのようなアイロニカルな間テクスト性を通じることで、「グロサ」における瞬間的なエビフ アニーが明らかになる。特定での記述に隣接ず想歩火のイメージは、ダンテの火とは異なるサ エール独自の形象へと昇華されており、メランコリーの虚無的な宇宙の中で記憶を原動力に儚く 展開する生の営みとしての訪り、というサエール時学の核かが「グロサ」に観察されることを立 証した。 との書もとしての訪り、というサエール時学の核かが「グロサ」に観察されることを立 証した。 この希腊に基づいた学領論文をスペイン話にて執筆し、現在投稿を探している。また創業物と して、「グロサ」日本語説の準備を進め、こちらは2022年刊行予定となっている。 This research aims to clarify the principle of the creation of the Argentine writer Juan José Saer (1937-2005), through the intertextuality between his masterpice Glosa (1968) and Dante. To accomplish the purpose, I obtained several materials on the author, Argentime of Lain American Ilterature or Humanities in general, and tried a genetic approach as well as an analysis of the novel itself. The result of the intertextuality between his masterpice Glosa (1968) and Dante. To accomplish the purpose, I obtained several materials on the author, Argentime of Lain American Ilterature or Humanities in general, and tried a genetic approach as well as an analysis of the novel itself. The result of the intertextuality between his masterpice Glosa His intertextuality on purpose, I obtained several materials on the author, Argentime of Lain American Studies (JALAS). Its outline is as follows: Glos	Sub Title	Poetics of Juan José Saer : through the intertextuality with Dante in Glosa				
Publication year         2022           Jittle         学事展型会研究成果実練報告書(2021.)           JaLC DOI         Abstract         本研究は、アルゼンチンの作家フアン・ホセ・サエール(1937-2005)の代表作『グロサ』(1986)           Abstract         本研究は、アルゼンチンの作家フアン・ホセ・サエール(1937-2005)の代表作『グロサ』(1986)           な)におけるダンテたの間テクスト性を選びて、作素自身の創作厚理の一端を明らかにするものである。送行にあってなけ作家本人、ならびにアルゼンチンダ/ラテンアメリカ文学さらには人 文学一般に関する研究文献を入手して草積レベルからの作家研究はよび作品分析を行い、その成 果を着42回ラテンアメリカ学会定期大えにて個人発表「アアン・ホセ・サエール『クロサ』」 におけるダンラの存む」として発表した。発表の概要は以下の通りである。 "グロサ』においては古典から現代に至るさまざまな作家たの間テクスト性が見られるが、ダン テとのそれは詳細に調みられてこなかった。とはいえ作家が書いた三篇の詩「ダンテ」において 観察しる各緒後、特に三人ての散歩という要素は『グロサ』と重なるものであり、また小説絵結 部の虚無的な宇宙観が「天国篇』への対抗として書かれているのみならず、未来の破局から現在 ど既料するその構成は比喩形象的リアリズム(アウゴルバソハ))を逆向きの形で見見化している 。そのようなアイロニカルな間テクスト性を通じることで、『グロサ』における時間かなエビフ アニーが明らかにねる。特にその記述に隣接する埋み火のイメージは、ダンテの火とは異なす レール場白の光条へと昇華されており、メランコリーの虚無的な宇宙中で記憶を原動かた目巻く 展開するたの書みとしての語り、というサエール詩学の核心が『グロサ』に観察されることを立 証した。           上の報告に基づいた学術論文をスペイン語にて執筆し、現在投稿先を探している。また副産物と して、『グロサ』日本語訳の準備を進め、こちらは2022年刊行予定となっている。 This research ains to clarify the principle of the creation of the Argentine writer Juan José Saer (1937-2005), through the intertextuality between his masterpice Glosg (1966) and Dante. To accomplish the purpose, I obtained several materials on the admonter varies of Japan Association for Latin American Studies (JALAS), Its outine is as follows: Glosa has intertextualities with various writers from Ancient Times to Modern times, but the one with Dante has not been analyzed in detail. Nevertheless, the three poems writen by Saer and compilated under the title Dante, have some elements in common with Glosa -especially a promenade by three characters. Moreover, the nihilistic converse of Japan Association for Latin American Studies (JALAS). Its outine is as follows: Glosa has intertextualities with various writers from Ancient Times to Modern times, but the one with Da	Author	浜田, 和範(Hamada, Kazunori)				
Jittle         学事振興資金研究成果実績報告書(2021.)           JaLC DOI         Abstract           Abstract         本研究は、アルゼンチンの作家フアン・ホセ・サエール(1937-2005)の代表作『グロサ』(198 6)におけるダンテとの間テクスト性を通じて、作家自身の創作原理の一端を明らかにするもので ある。遂行にあたっては作家本人、ならびにアルゼンチン文学/ラテンアメリカ文学さらには人 文学ーの低調する研究文蔵を入して着風レベルからの作家研究および作品がかを行い、その成 果を第42回ラテンアメリカ学会定期大会にて個人発表「アアン・ホセ・サエール『グロサ』」 におけるダンテの存在」として発表した。発表の概要は以下の通りである。 『グロサ』においては古典から現代に至るさまざまな作家との間テクスト性が見られるが、ダン テとのそれは詳細に顧みられてこなかった。とはいえ作家が書いた三篇の詩「ダンテ」において 観察しうる特徴、特に三人での散歩という要素は『グロサ』と重なものであり、また小説終結 部の虚無的な宇宙観が『天国篇』への対抗として書かれているのみならず、未来の破局から現在 を照射するその構成は比喩形象的リアリズム(アウエルバッハ)を送向きの形で見現化している 。そのようなアイロニカルな間テクスト性を通じることで、『グロサ』における疑問的なエピビ アニーが明らかになる。特にその記述に関接する埋み火のイメージは、ダンテの火とは異なるサ エール独自の形象へと昇華されており、メンランコリーの虚無的な宇宙の中で記憶を原動力に優く 展開する生の営みとしての語り、というサエール詩学の核心が『グロサ』に観察されることを立 証した。 上の報告に基づいた学術論文をスペイン語にて執筆し、現在投稿先を探している。また副蘆物と して、『グロサ』日本語訳の準備を進め、こちらは2022年刊行予定となっている。 This research aims to clarify the principle of the creation of the Argentine writer Juan José Saer (1937-2005), through the intertextuality between his masterpiece Glosa (1986) and Dante. To accomplish the purpose, I obtained several materials on the author, Argentine or Latin American literature or Humanities in general, and tried a genetic approach as well as an analysis of the nove itself. The result of the investigation was published as an academic paper titled "The Presence of Dante in Juan José Saer's Glosa", read at the 42nd Congress of Japan Association for Latin American Studies (JALAS). Its outline is as follow: Glosa has intertextualities with various writers from Ancient Times to Modern times, but the one with Dante has not been analyzed in detail. Nevertheless, the three poems written by Saer and compliated under the tite Dante', have some elements in common with Glosa =especially a promenade by three characters. Moreover, the nihilistic curverse full of melanchy. I wrote an academic article in Spanish based on the paper mentioned above, and am looking for where to	Publisher	慶應義塾大学				
JaLC DOI           Abstract         本研究は、アルゼンチンの作家フアン・ホセ・サエール(1937-2005)の代表作『グロサ』(198 6)におけるダンテとの開テクスト性を通じて、作家自身の創作原理の一端を明らかにするもので ある。遂行にあたっては作家本人、ならびにアルゼンチン文学/ラテンアメリカ文学さらには人 文学一般に関する研究文職を入手して単構レベルからの作家研究はよび作品分析を行い、その成 果を第4 2回ラテンアメリカ全定期大会にて個人発表「アアン・ホセ・サール『グロサ』」 におけるダンテの存在」として発表した。発表の概要は以下の通りである。 『グロサ』においては古典から現代に至るさまざまな作家との関テクスト性が見られるが、ダン テとのそれは詳細に顕みられてこなかった。とはいえ作家が書いた三篇前『ダンテ』において 観察しうる特徴、特に三人での散歩という要素は『グロサ』と互なるものであり、また小説終結 部の虚無的な宇宙観が「天国道」への対抗として書かれているのみならず、未釈の暖局から現在 を照射するその構成は比喩形象的リアリズム(アウエルバッハ)を逆向きの形で見現化している 。そのようなアイロニカルな間テクスト性を通じることで、『グロサ』における瞬間的なエピフ アニーが明らかになる。特にこの記述に隣接て多せ違んのイメージは、ダンテの火とは異なるサ エール独自の形象へと昇筆されており、メランコリーの虚無的な宇宙の中で記憶を原動力に受く 展開する生の営みとしての語り、というサエール時学の核心が『グロサ』に観察されることを立 証した。 上の報告に基づいた学術論文をスペイン語にて執筆し、現在技構先を探している。また副産物と して、『グロサ』日本語訳の準備を進め、こちらは2022年刊行予定となっている。 This research aims to clarify the principle of the creation of the Argentine writer Juan José Saer (1937-2005), through the intertextuality between his masterpiece Glosa (1986) and Dante. To accomplish the purpose, I obtimed several materials on the author, Argentine or Latin American Itterature or Humanities in general, and tried a genetic approach as well as an analysis of the rove itself. The result of the investigation was published as an academic paper tildel "The Presence of Dante in Juan José Saer's Glosa", red at the 42nd Congress of Japan Association for Latin American Studies (JALAS). Its outline is as follow:: Glosa has intertextualities with various writers from Ancient Times to Modern times, bot the one with Dante has not been analyzed in detail. Nevertheless, the three poems written by Saer and compliated under the tile 'Dante', have some elements in common with Glosa -especially a promenade by three characters. Moreover, the nihilistic curves fuel in writen as a countervision of Paradiso; and its composition that paper mentioned above, and an looking for where to publish it. I also prepared the Japanese edition of Glosa, which will be published in 2022. Notes <td< td=""><td>Publication year</td><td colspan="5">2022</td></td<>	Publication year	2022				
Abstract         本研究は、アルゼンチンの作家フアン・ホセ・サエール(1937-2005)の代表作『グロサ』(198 6)におけるダンテとの間テクスト性を通じて、作家自身の創作原理の一端を明らかにするもので ある。送行にあたっては作家本人、ならびにアルゼンチン文学/ラテンアメリカ文学さらには人 文学ー般に関する研究文献を入手して草稿レベルからの作家研究および作品分析を行い、その成 果を集 4 2 回ラテンアメリカ学会定期大会にて個人発表「アフン・ホセ・サエール『グロサ』」 におけるダンテの存在」として発表した。発表の概要は以下の通りである。 『グロサ』においては古典から現代に至るさまざまな作家の間テクスト性が見られるが、ダン テとのそれは詳細に腋みられてこなかった。とはいえ作家が書いた三篇の詩「ダンテ」において 戦寒しうる特徴、特に三人での散歩という要素は『グロサ』と重なるものであり、また小説絵花 部の虚無的な宇宙観が「天国篇」への対抗として書かれているのみならず、未来の破局から現在 を照射するその構成は比喩形象的リアリズム(アウエルバッハ)を逆向きの形で具現化している 。そのようなアイロニカルな間テクスト性を通じることで、「グロサ』における瞬間的なエピフ アニーが明らかになる。特にその記述に隣接する埋み火のイメージは、ダンテの火とは異なるサ エール独自の形象へと昇差されており、メランコリーの虚無的な宇宙の中記憶を原動力に優く 展開する生の営みとしての語り、というサエール詩学の核心が『グロサ』に観察されることを立 配した。 上の報告に基づいた学術論文をスペイン話にて執筆し、現在投稿先を探している。また副産物と して、『グロサ』日本語訳の準備を進め、こちらは2022年刊行予定となっている。 This research aims to clarify the principle of the creation of the Argentine writer Juan José Saer (1937-2005), through the intertextuality between his masterpicce Glosa (1986) and Dante. To accomplish the purpose, I obtained several materials on the author, Argentine or Latin American literature or Humanities in general, and tried a genetic approach as well as an analysis of the novel itself. The result of the investigation was published as an academic paper titled "The Presence of Dante in Juan José Saer's Glosa", read at the 42nd Congress of Japan Association for Latin American Studies (JALAS). Its outline is as follows: Glosa has intertextuality betwench is masterpicce Glosa (Josa -especially a promende by three characters. Moreover, the nihilistic cosmovision at its end is writen as a countervision of Paradiso; and its compastion figurative realism, At the same time, the ephemeral epiphany of Glosa is clear through this intertextuality betperestion figurative realism, the same time, the ephemeral epiphany, explains the core of Saer's poetics: narration as an ephemeral act of life driven by the reminiscence in the middle of the nihillistic universe full of melancholy. I wrote an academic article in Spanish based on the pape	Jtitle	学事振興資金研究成果実績報告書 (2021.)				
<ul> <li>6)におけるダンテとの間テクスト性を通じて、作家自身の創作原理の一端を明らかにするものである。遂行にあたっては作家本人、ならびにアルセンデン交学/フテンアメリカ文学さらには人文学・般に関する研究文献な入手して草稿レベルからの作家研究みよび作品分析を行い、その成文学・般に関する研究文献な入手して草稿レベルからの作家研究わよび作品分析を行い、その成文集を第42回ラテンアメリカ学会定期大会にて個人発表「フアン・ホセ・サエール『グロサ』」におけるダンテの存在」として発表した。発表の概要は以下の創である。 『グロサ』においては古典から見祝に至るなきまざまな作家との間テクスト性が見られるが、ダンテとのそれは詳細に顧みられてこなかった。とはいえ作家が書いた三篇の詩「ダンテ」において観察しうる特徴、特に三人での散歩という要実は『グロサ』と重なるものであり、また小説純結節の虚焼的な宇宙観が「天田編』への対抗として書かれているのみならず、未来の役画からの局から現在 でのようなアイロニカルな間テクスト性を通じることで、『グロサ』と重なるものであり、また小説純結節の虚焼的な宇宙観が「天田編』への対抗として書かれているのみならず、未来の役画からの見から見て を照射するその構成は比喩形象的リアリズム(アウエルバッハ)を逆向きの形で具現化している。 そのようなアイロニカルな間テクスト性を通じることで、『グロサ』には別な瞬間的なエビフ アニーが明らかになる。特にてその記述に関接する埋み火のイメージは、ダンテの火とは異なるサ エール独自の形象へと昇撃されており、メランコリーの虚無的な宇宙の中で記憶を原動力に優く 展開する生の営みとしての語り、というサエール時学の核心が「プロサ』に観察されることを立 証した。 上の報告に基づいた学術論文をスペイン語にて執筆し、現在投稿先を探している。また副産物として、『グロサ』日本語訳の準備を進め、こちらは2022年刊行予定となっている。 This research aims to clarify the principle of the creation of the Argentine writer Juan José Saer (1937-2005), through the intertextuality between his masterpiece Glosa (1986) and Dante. To accomplish the purpose, I obtained several materials on the author, Argentine or Lain American literature or Humanities in general, and thid a genetic approach as well as an analysis of the novel itself. The result of the investigation was published as an academic paper tilded "The Presence of Dante in Juan José Saer's Glosa", read at the 42nd Congress of Japan Association for Lalin American Studies (JALAS). Its outline is as follows: Glosa has intertextualities with various writers from Ancient Times to Modern times, but the one with Dante has not been analyzed in detail. Nevertheless, the three poems written by Saer and compliated under the tild approxibactive realism. Aft the same time, the ephemeral epiphany. explains the care of Glosa as intertextualities with various writers from Ancient Times to Modern times, but the one with Dante has not been analyzed in detail. Nevertheless, the three poems written by Saer and compliated under the tild approxibactive realism. A</li></ul>	JaLC DOI					
Genre Research Paper		文学一般に関する研究文献を入手して草稿レベルからの作家研究および作品分析を行い、その成果を第42回ラテンアメリカ学会定期大会にて個人発表「フアン・ホセ・サエール『グロサ』」 におけるダンテの存在」として発表した。発表の概要は以下の通りである。 『グロサ』においては古典から現代に至るさまざまな作家との間テクスト性が見られるが、ダン テとのそれは詳細に顧みられてこなかった。とはいえ作家が書いた三篇の詩「ダンテ」において 観察しうる特徴、特に三人での散歩という要素は『グロサ』と重なるものであり、また小説終結 部の虚無的な宇宙観が『天国篇』への対抗として書かれているのみならず、未来の破局から現在 を照射するその構成は比喩形象的リアリズム(アウエルバッハ)を逆向きの形で具現化している 。そのようなアイロニカルな間テクスト性を通じることで、『グロサ』における瞬間的なエピフ アニーが明らかになる。特にその記述に隣接する埋み火のイメージは、ダンテの火とは異なるサ エール独自の形象へと昇華されており、メランコリーの虚無的な宇宙の中で記憶を原動力に儚く 展開する生の営みとしての語り、というサエール詩学の核心が『グロサ』に観察されることを立 証した。 上の報告に基づいた学術論文をスペイン語にて執筆し、現在投稿先を探している。また副産物と して、『グロサ』日本語訳の準備を進め、こちらは2022年刊行予定となっている。 This research aims to clarify the principle of the creation of the Argentime writer Juan José Saer (1937-2005), through the intertextuality between his masterpiece Glosa (1986) and Dante. To accomplish the purpose, I obtained several materials on the author, Argentime or Latin American literature or Humanities in general, and tried a genetic approach as well as an analysis of the novel itself. The result of the investigation was published as an academic paper titled "The Presence of Dante in Juan José Saer's Glosa", read at the 42nd Congress of Japan Association for Latin American Studies (JALAS). Its outline is as follows: Glosa has intertextualities with various writers from Ancient Times to Modern times, but the one with Dante has not been analyzed in detail. Nevertheless, the three poems written by Saer and compliated under the title 'Dante', have some elements in common with Glosa -especially a promenade by three characters. Moreover, the nihilistic cosmovision at its end is written as a countervision of Paradiso; and its composition that puts the present in the perspective from the future is a reverse incarnation of Erich Auerbach's figurative realism. At the same time, the ephemeral epiphany of Glosa is clear through this intertextuality. Especially, the description of embers, adjacent to that epiphany, explains the core of Saer's poetics: anration as an ephemeral act of life driven by the reminiscence i				
	Notes					
URL https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=2021000003-20210110	Genre	Research Paper				
	URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=2021000003-20210110				

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって 保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 2021 年度 学事振興資金(個人研究)研究成果実績報告書

reminiscence in the middle of the nihilistic universe full of melancholy. I wrote an academic article in Spanish based on the paper mentioned above, and am looking for where to publish it. I also prepared the Japanese edition of Glosa, which will be published in 2022. 3. 本研究課題に関する発表 発表者氏名 (著者・講演者) (著書名・演題) (著書名・演題) 学術誌発行年月 (著書発行所・講演学会) (著書発行年月・講演年月) 浜田和範 フアン・ホセ・サエール『グロサ』に 第 42 回日本ラテンアメリカ学会定 2021 年 6 月 6 日												
氏名         浜田 和範         氏名 (英部)         Kazunori Hamada            研究課題(日本語)         フアン・ホセ・サエールの詩学――『グロサ』におけるダンテとの間テクスN性を通して            研究課題(笑歌)           Poetics of Juan José Saer-through the intertextuality with Dante in Glosa            第次課題(安歌)            アレゼンチンの作家フアン・ホセ・サエール(1937-2005) の代表作『グロサ』(1986)におけるダンテとの間テクスト性を通じ て、作家自身の創作原理の一端を明らかにするものである。違行にあたっては作家本人、ならびにアルゼンチンジア・クランアメリカ シダさらには人文学一参院に関する研究文館 ズトモレマ華ロレベルからの作家研究および作品分析を行い、その成果を第420ヨテン アメリカ学会定期大会にて個人発表「フアン・ホセ・サエール『グロサ』」におけるダンテの存在」として発表した。発表の概要(は以下の通 りである。           プリカリニおいては古典から現代に至るさまざまな作家との間テクスト性が見られるが、ダンテとのそれは詳細に顧みられてこなかっ た。とはいえ作家が高いた三面の詩『ダンテ』において戦察しうる特徴、特に三 人での散歩という要素はグロサ」と重なるものであり、 ジェルは製作的の宣曲的な手留戦が「天国国」への対抗として書かれているのみならざ、未来の破局から現在を説明するその構成は 比喩形象的リアリズム(アウエルバッハ)を逆向きの形で見現してする。それよくなおマイロニカルな間間的なエピファニーが明られいこな。特にその記述に関係さるサムシィール4 自の形象へと昇華おれており、メランコリーの虚無的な字曲の中で記信を原動力に儚く展開する生の営みとしての語り、というサエール 静学の核心が『グロサ』に観察えるペイン語にて戦争し、現在投稿先を探している。また副産物として、『グロ サ」日本語訳の準備を進 め、こちらは 2022 年刊行予定となっている。            2. 研究成果実練の概要            2. 研究成果実練の概要            2. 研究成果実施の報要            2. 研究成本のやで記信を原動力に儚く(展開する生の営みとしての語り、というサエール 均の影々と昇華されており、メランコリーの意能的な字面の中で記信を原動力に儚く(展開する生の)             2. 研究成本実実施の数要            2. 研究成本実施の数要 <td rowspace<="" td=""><td rowspan="2">研究代表者</td><td>所属</td><td>法学部</td><td>職名</td><td>専任講師</td><td>→ 補助額</td><td rowspan="2">100 (C</td><td>C)</td><td>千円</td></td>	<td rowspan="2">研究代表者</td> <td>所属</td> <td>法学部</td> <td>職名</td> <td>専任講師</td> <td>→ 補助額</td> <td rowspan="2">100 (C</td> <td>C)</td> <td>千円</td>	研究代表者	所属	法学部	職名	専任講師	→ 補助額	100 (C	C)	千円		
フアン・ホセ・サエールの詩学――『グロサ』におけるダンテとの間テクスト性を通して         研究課題 (笑訳)         Poetics of Juan José Saer—through the intertextuality with Dante in Glosa         1. 研究成果実績の概要         本研究は、アルゼンテンの作家フアン・ホセ・サエール(1937-2005)の代表(押)の中J](1986)におけるダンテとの間テクスト性を通して、         (木家自身の創作原理の一端を明らかにするものである。送行にあたっては作家本人、ならびにアルゼンチン文学/フランアメリカ         文学さらには人文学―般に関する研究文献を入手して草粽レベルからの作家研究および作品分析が拒くい、その成果を差42回ラテン         アメリカ学会定期大会にて個人発表「フアン・ホセ・サエール グロサJ]におけるダンテの存在」として発表した。発表の概要は以下の通りである。         パンドサールドグロサJ]におけるダンテの存在」として発表した。発表の概要は以下の通りである。         パンになった。とはいえ作家が書いた三篇の前ドダンテ」において観察しうる特徴、特に三人での飲歩という要素は「グロサJ」を載るものであり、         さたいたいま言論の時「ダンテ」において観察しうる特徴、特に三人での飲歩という要素は「グロサJ」を載るものであり、         またい記録解節の虚無的なギャ宙吸が「実園論」への対抗として書かれているのみならず、未来の破局から現在を照射するその構成は         比喩部を約りリアリズム(アウエルバッハ)と逆向らがで見現している。そのようなアイロニカルな間から入や性を進しことで、『グロ サ」における瞬間的なエピファーーが明らかになる。特にその記述に隣接する埋み火のイメージは、ダンテの火とは異なるサエール         生きがないたおり、メラクコリーの虚無的な宇宙の中で記憶を原動力に優く展開する生の営みとしての語り、というサエール         生きがいた学術論文をスペイン語にて転車し、現在投稿先を探している。また副産物として、『グロサ』日本語歌の準備を進 のためないく芝生の直した。         上の確究体ですのの total 体検査を感じての語り、というサエール         まつれたおり、メラクコリーの虚無的な宇宙の中で記憶を原動力に優く(表部)          と前でれたおり、メラクンになる。特にその記述に隣接する埋み火のイメージは、ダンテの火とは異なるサエール         まつれたおり、メラクコリーの通知を指すを定している。         また副産物として、『グロサ』日本語歌の準備を進 の水をと昇差されており、メラクコリーののたまでのでいる。         まの目をのごかりたい、         まのするとないため	氏名		浜田 和範	氏名(英語)	Kazunori Hamada		.0/					
研究課題(笑訳)         Poetics of Juan José Saer—through the intertextuality with Dante in Glosa         1. 研究成果実績の概要         本研究は、アルゼンチンの作家フアン・ホセ・サエール(1937-2005)の代表作『グロサ』(1986)におけるダンテとの間テクスト性を通じ て、作家自身の副作原理の一端を明らかにするものである。遂行にあたっては作家本人、ならびにアルゼンチン文学/ラテンアメリカ 文学さらには人文字一般に開する研究文策を入手して草ねしべルからの作家で研究および作品分析を行い、その成果名客42回ラテン アメリカ学会定期大会にて個人発表「フアン・ホセ・サエール『グロサ』におけるダンテの存在」として発表した。発表の概要は以下の通 りである。         パプロサ』においては古典から現代に至るさまざまな作家との間テクスト性が見られるが、ダンテとのそれは詳細に顧みられてこなかっ た。とはいえ作家が書いた三篇の詩『ダンテ』において観察しろ特徴、特に三人での散歩という要素は『グロサ』と喜なるものであり、 また小説終者部の虚無的な宇宙観が「天国通」への対抗として書かれているのみならず、未来の破局から現在を照するその構成れ となかかくたっます電観が「天国通」への対抗として書かれていいるのみならず、未来の破局から現在を照するその構成れ という地子=回動的なエピファニーが明らかになる。特にその記述に隣接する埋み火のイメージは、ダンテの人とは異なるサエール独 自の形象へと昇華されており、メランコーーの虚無的な宇宙の中で記憶を原動カに『夜儀開する生のざあい ノナントゼンロ語り、というサエール かけこおける瞬間的なエピファニーが明らかになる。特にその記述に隣接する埋み火のイメージは、ダンテの火とは異なるサエール独 自の形象へと昇華されてより、メランコーーの意無的な宇宙の中で記憶を原動カに『夜儀開する生の書り、というサエール かきの教心が『グロサ』に観察されることを立証した。         Lの報告になうっいた学が高読な交スペイン部にても数に見て職様する埋み火のイメージは、ダンテの火とは異なるサエール きつの核心が『グロサ』に観察されることをご証にた。         Lの報告になうっいたる。       ・         P1における瞬間かなエピファーが明らかになる。特にその記述の「花を展す」を図書かとしての語り、というサエール きつの核心が『グロサ』に観察されることを立証にた。           Lの報告になっている。       ・           シンたちらは 2022 年刊行予定となっている。           2. 研究成果葉の概要 (英家)           This research aims to clarify the principle of the creation of the Argentine writer Juan José Saer (1937-2005), through the author, Argentine or Latin American literature or Humanities in general, and tried a genetica approach as well as an analysis of the novel itself. The result of the investigation was published as an academic paper the Saer and compilated under the title Dante, have sonther sinauto Jase Saer's Glosa", read at the 42nd Congress of Japan Association for Latin American Studi			研	究課題(日本語	吾)							
Poetics of Juan José Saer—through the intertextuality with Dante in Glosa         1. 研究成果実績の概要         本研究は、アルゼンチンの作家フアン・ホセ・サエール(1937-2005)の代表作[『グロサ』[(1986)[におけるダンテとの間テクスト性を通じ て、作家自身の創作原理の一端を明らかにするものである。遂行にあたっては作家本人、ならびにアルゼンチン文学/フテンアメリカ 文学さらには人文学一般に関する研究文献を入手して草稿レイルからの作家研究および作品分析を行い、その成果を第42回ラテン アメリカ学会定期大会にて個人発表「フアン・ホセ・サエール[『グロサ』]におけるダンテの存在」として発表した。発表の概要は以下の通 りである。         『グロサ』においては古典から現代に至るさまざまな作家との間テクスト性が見られるが、ダンテとのそれは詳細に願みられてこなかっ た。とはいえ作家が書いた三篇の詩『ダンテ」において観察しう各特徴、特に三人での散歩という要素は』グロサルと重なるものであり、 また小説終結部の虚無的な宇宙観が『天国篇』への対抗として書かれているのみならず、未来の破局から現在を照射するその構成は 比喩形象的リアリズム(アウエルバッハ)を逆向きの形で見現化している。そのようなアイロニカルな間テクスト性を通じることで、『グロ リによける疑問的なエピファニーが明らかになる。特にその記述に隣接する塩み火のイメージは、ダンテクルとは異なるサエール独 自の形象へと昇華されており、メランコリーの虚無的な宇宙の中で記憶を原動力に優く展開する生の営みとしての語り、というサエール 静学の核心が『グロサル!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!	フアン・ホセ・サエールの詩学ーー『グロサ』におけるダンテとの間テクスト性を通して											
Poetics of Juan José Saer—through the intertextuality with Dante in Glosa         1. 研究成果実績の概要         本研究は、アルゼンチンの作家フアン・ホセ・サエール(1937-2005)の代表作[『グロサ』[(1986)[におけるダンテとの間テクスト性を通じ て、作家自身の創作原理の一端を明らかにするものである。遂行にあたっては作家本人、ならびにアルゼンチン文学/フテンアメリカ 文学さらには人文学一般に関する研究文献を入手して草稿レイルからの作家研究および作品分析を行い、その成果を第42回ラテン アメリカ学会定期大会にて個人発表「フアン・ホセ・サエール[『グロサ』]におけるダンテの存在」として発表した。発表の概要は以下の通 りである。         『グロサ』においては古典から現代に至るさまざまな作家との間テクスト性が見られるが、ダンテとのそれは詳細に願みられてこなかっ た。とはいえ作家が書いた三篇の詩『ダンテ」において観察しう各特徴、特に三人での散歩という要素は』グロサルと重なるものであり、 また小説終結部の虚無的な宇宙観が『天国篇』への対抗として書かれているのみならず、未来の破局から現在を照射するその構成は 比喩形象的リアリズム(アウエルバッハ)を逆向きの形で見現化している。そのようなアイロニカルな間テクスト性を通じることで、『グロ リによける疑問的なエピファニーが明らかになる。特にその記述に隣接する塩み火のイメージは、ダンテクルとは異なるサエール独 自の形象へと昇華されており、メランコリーの虚無的な宇宙の中で記憶を原動力に優く展開する生の営みとしての語り、というサエール 静学の核心が『グロサル!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!												
1. 研究成果実績の概要     本研究は、アルゼンテンの作家ファン・ホセ・サエール(1937-2005)の代表作ドグロサ』(1986)におけるダンテとの間テクスト性を通じ     文作家自身の創作原理の「電券明らかにするものである。遂行にあたっては作家本人、ならびにアルゼンデン文学・クランアメリカ     文学さらには人文学一般に関する研究文献を入手して草稿レベルからの作家研究および作品分析を行い、その成果を第42回ラテン     アメリカ学会定期大会にて個人発表「ファン・ホセ・サエール『グロサ』」におけるダンテの存在」として発表した。発表の概要は以下の通     vである。     『グロサ』においては古典から現代に至るさまざまな作家との間テクスト性が見られるが、ダンテとのそれは詳細に顧みられてこなかっ     た。とおいえ作家が書いた三篇の詳「ダンテ」によいて観察しうる特徴、特に三人での散歩という要素は『グロサ』と重なるものであり、     rとか説を銘いの要素で加いているの大くの教歩という要素は『グロサ』と重なるものであり、     また小説終着部の意無的な手幅観が「天田編」への対抗として書かれているのみならず、未来の破局から辺存を解測するその構成は     比喩形象的リアリズム(アウエルバッハ)を逆向きの形で見現化している。そのようなアイロニカルな間テクスト性を通じることで、『グロ     サ』における瞬間的なエピファーが明らかになる。特にその記述に隣接する望み火ののイメージは、ダンテの火とは異なるサエール独     時の形象へと昇華されており、メランコリーの血虚無的な宇宙の中で記憶を原動力に像く展開する生の営みとしての語り、というサエール     時づかえをスペイン話にてない事しの中で記憶を原動力に像く展開する生の営みとしての語り、というサエール     時の心が『グロサ』に観察されることを立証した。     上の報告に基づいた字術論文をえペイン話にてない。     またの記念を認定で知ら、たいる。また副産物として、『グロサ』目本話訳の準備を進     め、こちらは 2022 年刊行予定となっている。         2. 研究成果実績の概要 (実証)         This research aims to clarify the principle of the creation of the Argentine writer Juan José Saer (1937-2005), through the intertextuality between his masterpiece Glosa (1986) and Dante. To accomplish the purpose, I obtained several materials on the intertextuality between his masterpiece Glosa (1986) and Dante. To accomplish the purpose, I obtained several materials on the intertextuality between his masterpiece Glosa (1986) and Dante. To accomplish the purpose, I obtained several materials on the intertextuality and congress of Japan Association for Latin American Studies (JALAS). Its outline is as follow:         Glosa 'nead the 42 <sup>ad</sup> Congress of Japan Association for Latin American Studies (JALAS). Starter actuation of Erich Auerbach's presence of Dante in Japa José Saer's Glosa', read the 42 <sup>bd</sup> Congress of Japan Association for Latin American Studies (JALAS). Its outline is as follow:          Glosa has intertextualities with various writters from Ancient Times to bodern times, but the one with Dante has not been analyzed in defaise on the pipany explains th												
1. 研究成果実績の概要         本研究は、アルゼンチンの作家フアン・ホセ・サコール(1937-2005)の代表作ドグロサリ(1986)におけるダンテとの間テクスト性を通じ、         アドロシーンの作家フアン・ホセ・サコール(1937-2005)の代表作ドグロサリ(1986)におけるダンテとの間テクスト性を通じ、         アメリカ学会には人文学一般に関する研究文献を入手して草稿レベルからの作家研究および作品分析を行い、その成果を第42回ラテンアメリカ学会には人文学一般に関する研究文献を入手して草稿レベルからの作家研究および作品分析を行い、その成果を第42回ラテントン・オセ・サコールドグロサリ」におけるダンテの存在」として発表した。発表の概要は以下の通りである。         アグロサリにおいては古典から現代に至るさまざまな作家との間テクスト性が見られるが、ダンテとのそれは詳細に顧みられてこなかった。とはいえ作家が書いた三篇の第ドダンク」において観察しろ4特徴、特に三人での散歩という要素はゴグロサリ上重なるものであり、         また小説終着部の意無約なず宮匐(パレマ)の散歩という要素はゴグロサリ上重なるものであり、         また小説終着部の意無約なず宮匐(パレマン)の改進的なず宮周知しているのようず、未来の破局から辺存を構成は、         比喩形象的リアリズム(アウエルバッハ)を逆向言の形で見現化している。そのようなアイロニカルな間テクスト性を通じることで、『グロ サリニおける瞬間的なエピフアニーが明らかになる。特にその記述に隣接する望歩火のイメージは、ダンテの火とは異なるサエール独 自の形象へと昇華されており、メランコリーの虚無的なず音の中で記憶を原動力に像く展開する生の営みとしての話り、というサエール 時学の核心が『グロサリに観察されることな立証した。         上の報告に基づいた字術論文をスペイン語にてない。       そのようなどのざんいごがつよいというサエール 時学の核心が『グロサリに観察されることな立証した。         上の報告に基づいた字術論文をスペイン語にてない。       2. 研究成果実検の概要(実施)         かったちにない。       2. 研究成果実検の概要(実施)         たいないが『グロサリに観察されることな立証した。       2. 研究成果実検の概要(実施)         たいないないなどなペイン語にてない。       2. 研究成果実検の概要(実施)         たいないが『グロサリに観察されることなっごれる。       2. 研究成果実検の概要のであい。         のないが「グロサリに観察されることな立証した。       2. 研究成果実検している。         1. 新たいないないないないないないないないないないないないないないないないないないな	Poetics of Jua	n José Saer—th	rough the intertextuality with	Dante in Glosa								
本研究は、アルゼンチンの作家フアン・ホセ・サエール(1937-2005)の代表作『グロサ』(1986)におけるダンテとの間テクスト性を通じ て、作家自身の創作原理の一端を明らかにするものである。遂行にあたっては作家本人、ならびにアルゼンチン文学/ラテンアメリカ 文学さらには人文学一般に関する研究文献を入手して草稿レベルからの作家研究および作品分析を行い、その成果を変れ名と回ラテン アメリカ学会定期大会にて個人発表『フアン・ホセ・サエール『グロサ』におけるダンテの存在」として発表した。発表の概要は以下の通 りである。 『グロサ』においては古典から現代に至るさまざまな作家との間テクスト性が見られるが、ダンテとのそれは詳細に顧みられてこなかっ た。とはいえ作家が書いた三篇の詩「ダンテ」において観察しうる特徴、特に三人での散歩という要素は『グロサ』と重なるものであり、 また小説終結部の虚無的な宇宙観が『天国篇』への対抗として書かれているのみならず、未来の破局から現在を照射するその構成は 比喩形象約リアリズム(アウエルバッハ)を逆向きの形を見現化している。そのようなアイロニカルな間テクスト性を直してこそ『グロ サ』における瞬間的なエピファニーが明らかになる。特にその記述に隣接する埋み火のイメージは、ダンテの火とは異なるサエール独 自の形象へと昇華されており、メランコリーの虚無的な宇宙の中で記憶を原動力に停く展開する生の営みとしての語り、というサエール 詩学の核心がダイワサ』に観察されることを立証した。 しの報告に基づいた学術論文をスペイン語にて執筆し、現在投稿先を探している。また副産物として、『グロサ』日本語訳の準備を進 め、こちらは 2022 年刊行予定となっている。 2. 研究成果実績の概要 (英訳) This research aims to clarify the principle of the creation of the Argentime writer Juan José Saer (1937-2005), through the intertextuality between his masterpiece Glosa (1986) and Dante. To accomplish the purpose. I obtained several materials on the author, Argentine or Latin American Studies (JALAS). Its outline is as follows: Glosa "stead at the 42nd Congress of Japan Association for Latin American Studies (JALAS). Its outline is as follows: Glosa and intertature or Humanities in general, and tried a genetic approach as well as an analysis of the novel itself. The result of the investigation was published as an academic paper titled "The Presence of Dante in Jana José Saer's Glosa", read at the 42nd Congress of Japan Association for Latin American Studies (JALAS). Its outline is as follows: Glosa as intertextualities with various writters from Ancient Times to Modern times, but the one with Dante has not been analyzed in detail. Nevertheless, the three poems written by Saer and compilated under the title Tonte', have some elements in common with Glosa - sepecially a promenade by three characters. Moreover, the nihilistic cosmovision at its end is written as a countervision of emores, adjacent to that epiphany, explains the core of Saer's pectics: anration as a												
本研究は、アルゼンチンの作家フアン・ホセ・サエール(1937-2005)の代表作『グロサ』(1986)におけるダンテとの間テクスト性を通じ て、作家自身の創作原理の一端を明らかにするものである。遂行にあたっては作家本人、ならびにアルゼンチン文学/ラテンアメリカ 文学さらには人文学一般に関する研究文献を入手して草稿レベルからの作家研究および作品分析を行い、その成果を変れ名と回ラテン アメリカ学会定期大会にて個人発表『フアン・ホセ・サエール『グロサ』におけるダンテの存在」として発表した。発表の概要は以下の通 りである。 『グロサ』においては古典から現代に至るさまざまな作家との間テクスト性が見られるが、ダンテとのそれは詳細に顧みられてこなかっ た。とはいえ作家が書いた三篇の詩「ダンテ」において観察しうる特徴、特に三人での散歩という要素は『グロサ』と重なるものであり、 また小説終結部の虚無的な宇宙観が『天国篇』への対抗として書かれているのみならず、未来の破局から現在を照射するその構成は 比喩形象約リアリズム(アウエルバッハ)を逆向きの形を見現化している。そのようなアイロニカルな間テクスト性を直してこそ『グロ サ』における瞬間的なエピファニーが明らかになる。特にその記述に隣接する埋み火のイメージは、ダンテの火とは異なるサエール独 自の形象へと昇華されており、メランコリーの虚無的な宇宙の中で記憶を原動力に停く展開する生の営みとしての語り、というサエール 詩学の核心がダイワサ』に観察されることを立証した。 しの報告に基づいた学術論文をスペイン語にて執筆し、現在投稿先を探している。また副産物として、『グロサ』日本語訳の準備を進 め、こちらは 2022 年刊行予定となっている。 2. 研究成果実績の概要 (英訳) This research aims to clarify the principle of the creation of the Argentime writer Juan José Saer (1937-2005), through the intertextuality between his masterpiece Glosa (1986) and Dante. To accomplish the purpose. I obtained several materials on the author, Argentine or Latin American Studies (JALAS). Its outline is as follows: Glosa "stead at the 42nd Congress of Japan Association for Latin American Studies (JALAS). Its outline is as follows: Glosa and intertature or Humanities in general, and tried a genetic approach as well as an analysis of the novel itself. The result of the investigation was published as an academic paper titled "The Presence of Dante in Jana José Saer's Glosa", read at the 42nd Congress of Japan Association for Latin American Studies (JALAS). Its outline is as follows: Glosa as intertextualities with various writters from Ancient Times to Modern times, but the one with Dante has not been analyzed in detail. Nevertheless, the three poems written by Saer and compilated under the title Tonte', have some elements in common with Glosa - sepecially a promenade by three characters. Moreover, the nihilistic cosmovision at its end is written as a countervision of emores, adjacent to that epiphany, explains the core of Saer's pectics: anration as a	1. 研究成果実績の概要											
て、作家自身の創作原理の一端を明られにするものである。遂行にあたっては作家本人、ならびにアルゼンチン文学/ラテンアメリカ 文学さらには人文学一般に関する研究文献を入手して草稿レベルからの作家研究および作品分析を行い、その成果を第42回ラテン アメリカ学会定期大会にて個人発表「フアン・ホセ・サエール『グロサ』」におけるダンテの存在」として発表した。発表の概要は以下の通 りである。 『グロサ』においては古典から現代に至るさまざまな作家との間テクスト性が見られるが、ダンテとのそれは詳細に顧みられてこなかっ た。とはいえ作家が書いた三篇の詩「ダンテ」において観察しうる特徴、特に三人での散歩という要素は『グロサ』と重なるものであり、 またい影終結部の虚無的な宇宙観が『天国篇』への対抗として書かれているのみならず、未来の破局から現在を照射するその構成は 比喩形象的リアリズム(アウエルバッハ)を逆向きの形で具現化している。そのようなアイロニカルな間テクスト性を通じることで、『グロ サ』における瞬間的なエビファニーが明らかになる。特にその記述に隣接する埋み火のイメージは、ダンテの火とは異なるサエール独 自の形象へと昇華されており、メランコリーの虚無的な宇宙の中で記憶を原動力に停く展開する生の営みとしての語り、というサエール 詩学の核心が『グロサ』に観察されることを立証した。 上の報告にこ基づしいた学術論文文スペン語にて叙筆し、現在投稿先を探している。また副産物として、『グロサ』日本語訳の準備を進 め、こちらは 2022 年刊行予定となっている。 2. 研究成果実績の概要(笑訳) This research aims to clarify the principle of the oreation of the Argentime writer Juan José Saer (1937-2005), through the author, Argentine or Latin American Studies (JALAS). Its outline is as follows: Glosa", read at the 42nd Congress of Japan Association for Latin American Studies (JALAS). Its outline is as follows: Glosa has intertextualities with various writters from Ancient Times to Modern times, but the one with Dante has not been analysis of the novel itself. The result of the investigation was published as an academic paper titled "The Presence of Dante in Juan José Saer's Glosa", read at the 42nd Congress of Japan Association for Latin American Studies (JALAS). Its outline is as follows: Glosa has intertextualities with various writters from Ancient Times to Modern times, but the one with Dante has not been analysis of the novel itself. The result of the investigation was published as an academic paper titled "The Presence of Dante in Jaan José Saer's Glosa", read at the 42nd Congress of Japan Association for Latin American Studies (JALAS). Its outline is as follows: Glosa - sepecially a promenade by three characters. Moreover, the nihilistic cosmovision at its end is written as a countervision of Paradiso; and its composition that puts the present in the presence in demision for Kater periphany, explains the core of	本研究は、アノ	レゼンチンの作				ダンテとの間ティ	ウストヤ	まず	利じ			
文学さらには人文学一般に関する研究文献を入手して草稿レベルからの作家研究および作品分析を行い、その成果を第42回ラテン アメリカ学会定期大会にて個人発表「フアン・木セ・サエール『グロサ』におけるダンテの存在」として発表した。発表の概要は以下の通 りである。 『グロサ』においては古典から現代に至るさまざまな作家との間テクスト性が見られるが、ダンテとのそれは詳細に顧みられてこなかっ た。とはいえ作家が書いた三濃の詩『ジフラ』において観察しう各特徴、特に三人での散歩という要素は『グロサ』上重なるものであり、 また小説終結部の虚無的な宇宙観が「天国篇』への対抗として書かれているのみならず、未来の破局から現在を照射するその構成は 比喩形象的リアリズム(アウエルバッハ)を逆向きの形で具現化している。そのようなアイロニカルな間テクスト性を通じることで、『グロ サ』における瞬間的なエピファニーが明らかになる。特にその記述に隣接する埋み火のイメージは、ダンテの火とは異なるサエール独 自の形象へと見葬されており、メランコリーの虚無的な宇宙の中で記憶を原動力に儚く展開する生の営みとしての語り、というサエール 詩学の枝心が『グロサ』に観察されることを立証した。 上の報告に基づいた学術論文をスペイン語にて執筆し、現在投稿先を探している。また副産物として、『グロサ』日本語訳の準備を進 め、こちらは 2022 年刊行予定となっている。 2. 研究成果実績の概要(笑訳) This research aims to clarify the principle of the creation of the Argentine writer Juan José Saer (1937-2005), through the intertextuality between his masterpiece Glosa (1986) and Dante. To accomplish the purpose, I obtained several materials on the author, Argentine or Latin American literature or Humanities in general, and tried a genetic approach as well as an analysis of the novel itself. The result of the investigation was published as an academic paper titled "The Presence of Dante in Juan José Saer's Glosa", read at the 42nd Congress of Japan Association for Latin American Studies (JALAS). Its outline is as follows: Glosa has intertextualities with various writters from Ancient Times to Modern times, but the one with Dante has not been analyzed in detail. Nevertheless, the three poems written by Saer and compliated under the title 'Dante', have some elements in common with Glosa -especially a promenade by three characters. Moreover, the nihilistic cosmovision at its end is written as a countervision of Paradiso; and its composition that puts the present in the presence of Saer's poetics: narration as an ephemeral act of life driven by the reminiscence in the middle of the inhibits to core of Saer's poetics: narration as an ephemeral act of life driven by the reminiscence in the middle of the nihibits to core of Saer's poetics: narration as an ephemeral act of life driven by the remi												
りである。 『グロサ』においては古典から現代に至るさまざまな作家との間テクスト性が見られるが、ダンテとのそれは詳細に顧みられてこなかっ た。とはいえ作家が書いた三篇の詩「ダンテ」において親察しうる特徴、特に三人での散歩という要素は『グロサ』と重なるものであり、 また小説終結部の虚無的な宇宙観が『天国篇』への対抗として書かれているのみならず、未来の破局から現在を照射するその構成は 比喩形象的リアリズム(アウエルバッハ)を逆向きの形で具現化している。そのようなアイロニカルな間テクスト性を通じることで、『グロ サ』における際間的なビファニーが明らかになる。特にその記述に隣接する埋み火のイメージは、ダンテの火とは異なるサエール独 自の形象へと昇華されており、メランコリーの虚無的な宇宙の中で記憶を原動力に儚く展開する生の営みとしての語り、というサエール 詩学の核心が『グロサ』に観察されることを立証した。 上の報告に基づいた学術論文をスペイン語にで執筆し、現在投稿先を探している。また副産物として、『グロサ』日本語訳の準備を進 め、こちらは 2022 年刊行予定となっている。 2. 研究成果実綾の概要(英訳) This research aims to clarify the principle of the creation of the Argentine writer Juan José Saer (1937-2005), through the intertextuality between his masterpiece Glosa (1986) and Dante. To accomplish the purpose, I obtained several materials on the author, Argentine or Latin American literature or Humanities in general, and tried a genetic approach as well as an analysis of the novel itself. The result of the investigation was published as an academic paper titled "The Presence of Dante in Juan José Saer's Glosa <sup>*</sup> , read at the 42nd Congress of Japan Association for Latin American Studies (JALAS). Its outline is as follows: Glosa has intertative or Humanities in general, and tried a genetic approach as well as an analysis of the novel itself. The result of the investigation was published as an academic paper titled "The Presence of Dante in Juan José Saer's Glosa <sup>*</sup> , read at the 42nd Congress of Japan Association for Latin American Studies (JALAS). Its outline is as follows: Glosa has intertextualities with various writers from Ancient Times to Modern times, but the one with Dante has not been analyzed in detail. Nevertheless, the three poems written by Saer and compilated under the title Dante', have some elements in common with Glosa -especially a promenade by three characters. Moreover, the nihilistic cosmovision at its end is written as a countervision of Paradiso; and its composition that puts the present in the perspective from the future is a reverse incarnation of Erich Auerbach'												
『グロサ』においては古典から現代に至るさまざまな作家との間テクスト性が見られるが、ダンテとのそれは詳細に顧みられてこなかっ た。とはいえ作家が書いた三篇の詩「ダンテ」において観察しうる特徴、特に三人での散歩という要素は『グロサ』と重なるものであり、 また小説終結部の虚無的な宇宙観が『天国篇』への対抗として書かれているのみならず、未来の破局から現在を照射するその構成は 比喩形象的リアリズム(アウエルバッハ)を逆向きの形で具現化している。そのようなアイロニカルな間テクスト性を通じることで、『グロ サ』における瞬間的なエピファニーが明らかになる。特にその記述に隣接する埋み火のイメージは、ダンテの火とは異なるサエール独 自の形象へと昇華されており、メランコリーの虚無的な宇宙の中で記憶を原動力に儚く展開する生の営みとしての語り、というサエール 自の形象へと昇華されており、メランコリーの虚無的な宇宙の中で記憶を原動力に儚く展開する生の営みとしての語り、というサエール 静学の核心が『グロサ』に観察されることを立証した。 上の報告に基づいた学術論文をスペイン語にて執筆し、現在投稿先を探している。また副産物として、『グロサ』日本語訳の準備を進 め、こちらは 2022 年刊行予定となっている。 <b>2. 研究成果実績の概要(英訳)</b> This research aims to clarify the principle of the creation of the Argentine writer Juan José Saer (1937-2005), through the intertextuality between his masterpiece Glosa (1986) and Dante. To accomplish the purpose, I obtained several materials on the author, Argentine or Latin American literature or Humanities in general, and tried a genetic approach as well as an analysis of the novel itself. The result of the investigation was published as an academic paper titled "The Presence of Dante in Juan José Saer's Glosa ", read at the 42nd Congress of Japan Association for Latin American Studies (JALAS). Its outline is as follows: Glosa an intertextualities with various writers from Ancient Times to Modern times, but the one with Dante has not been analyzed in detail. Nevertheless, the three poems writen by Saer and compliated under the futle "Inter as a countervision of Paradiso; and its composition that puts the present in the perspective from the future is a reverse incarnation of Erich Auerbach's figurative realism. At the same time, the ephemeral epiphany of Glosa is clear through this intertextuality. Especially, the description of embers, adjacent to that epiphany, explains the core of Saer's poetics: narration as an ephemeral act of life driven by the reminiscence in the midle of the nihilistic universe full of melancholy. I wrote an academic article in Spanish based on the paper mentioned above, and am looking for where to publish it. I also prepared t												
た。とはいえ作家が書いた三篇の詩「ダンテ」において観察しうる特徴、特に三人での散歩という要素は『グロサ』と重なるものであり、 また小説終結部の虚無的な宇宙観が『天国篇』への対抗として書かれているのみならず、未来の破局から現在を照射するその構成は 比喩形象的リアリズム(アウエルバッハ)を逆向きの形で具現化している。そのようなアイロニカルな間テクスト性を通じることで、『グロ サ』における瞬間的なエピファニーが明らかになる。特にその記述に隣接する埋み火のイメージは、ダンテの火とは異なるサエール独 自の形象へと昇華されており、メランコリーの虚無的な宇宙の中で記憶を原動力に儚く展開する生の営みとしての語り、というサエール 詩学の核心が『グロサ』に観察されることを立証した。 上の報告に基づいた学術論文をスペイン語にて執筆し、現在投稿先を探している。また副産物として、『グロサ』日本語訳の準備を進 め、こちらは 2022 年刊行予定となっている。 と、研究成果実績の概要(笑訳) This research aims to clarify the principle of the creation of the Argentine writer Juan José Saer (1937-2005), through the intertextuality between his masterpiece Glosa (1986) and Dante. To accomplish the purpose, I obtained several materials on the author, Argentine or Latin American literature or Humanities in general, and tried a genetic approach as well as an analysis of the novel itself. The result of the investigation was published as an academic paper titled "The Presence of Dante in Juan José Saer's Glosa", read at the 42nd Congress of Japan Association for Latin American Studies (JALAS). Its outline is as follows: Glosa - especially a promenade by three characters. Moreover, the nihilistic cosmovision at its end is written as a countervision of Paradiso; and its composition that puts the present in the perspective from the future is a reverse incarnation of Erich Auerbach's figurative realism. At the same time, the ephemeral epiphany of Glosa is clear through this intertextuality. Especially, the description of embers, adjacent to that epiphany, explains the core of Saer's poetics: narration as an ephemeral act of life driven by the reminiscence in the middle of the nihilistic universe full of melancholy. I wrote an academic article in Spanish based on the paper mentioned above, and am looking for where to publish it. I also prepared the Japanese edition of Glosa, which will be published in 2022. 3. 本研究課題に関する発表、 <u>後表表者氏名</u> (著者・課題名) (著書名・企業者・企業者・行便子) (著書発行年月・課題(年月) 美田和範												
また小説終結部の虚無的な宇宙観が『天国篇』への対抗として書かれているのみならず、未来の破局から現在を照射するその構成は 比喩形象的リアリズム(アウエルバッハ)を逆向きの形で具現化している。そのようなアイロニカルな間テクスト性を通じることで、『グロ サ』における瞬間的なエビファニーが明らかになる。特にその記述に隣接する埋み火のイメージは、ダンテの火とは異なるサエール独 自の形象へと昇華されており、メランコリーの虚無的な宇宙の中で記憶を原動力に儚く展開する生の営みとしての語り、というサエール 詩学の核心が『グロサ』に観察されることを立証した。 上の報告に基づいた学術論文をスペイン語にて執筆し、現在投稿先を探している。また副産物として、『グロサ』日本語訳の準備を進 め、こちらは 2022 年刊行予定となっている。 2. 研究成果実績の概要(笑訳) This research aims to clarify the principle of the creation of the Argentine writer Juan José Saer (1937–2005), through the intertextuality between his masterpiece Glosa (1986) and Dante. To accomplish the purpose, I obtained several materials on the author, Argentine or Latin American literature or Humanities in general, and tried a genetic approach as well as an analysis of the novel itself. The result of the investigation was published as an academic paper titled "The Presence of Dante in Juan José Saer's Glosa", read at the 42nd Congress of Japan Association for Latin American Studies (JALAS). Its outline is as follows: Glosa has intertextualities with various writers from Ancient Times to Modern times, but the one with Dante has not been analyzed in detail. Nevertheless, the three poems written by Saer and compilated under the title "Dante", have some elements in common with Glosa -especially a promende by three characters. Moreover, the nihilistic cosmovision at its end is written as a countervision of Paradiso; and its composition that puts the present in the perspective from the future is a reverse incarnation of Erich Auerbach's figurative realism. At the same time, the ephemeral epiphany of Glosa is clear through this intertextuality. Especially, the description of embers, adjacent to that epiphany, explains the core of Saer's poetics: narration as an ephemeral act of life driven by the reminiscence in the middle of the nihilistic universe full of melancholy. I wrote an academic article in Spanish based on the paper mentioned above, and am looking for where to publish it. I also prepared the Japanese edition of Glosa, which will b												
サ』における瞬間的なエピファニーが明らかになる。特にその記述に隣接する埋み火のイメージは、ダンテの火とは異なるサエール独 自の形象へと昇華されており、メランコリーの虚無的な宇宙の中で記憶を原動力に儚く展開する生の営みとしての詰り、というサエール 詩学の核心が『グロサ』に観察されることを立証した。 上の報告に基づいた学術論文をスペイン語にて執筆し、現在投稿先を探している。また副産物として、『グロサ』日本語訳の準備を進 め、こちらは 2022 年刊行予定となっている。 2. 研究成果実績の概要(英訳) This research aims to clarify the principle of the creation of the Argentine writer Juan José Saer (1937-2005), through the intertextuality between his masterpiece Glosa (1986) and Dante. To accomplish the purpose, I obtained several materials on the author, Argentine or Latin American literature or Humanities in general, and tried a genetic approach as well as an analysis of the novel itself. The result of the investigation was published as an academic paper titled "The Presence of Dante in Juan José Saer's Glosa", read at the 42nd Congress of Japan Association for Latin American Studies (JALAS). Its outline is as follows: Glosa has intertextualities with various writers from Ancient Times to Modern times, but the one with Dante has not been analyzed in detail. Nevertheless, the three poems written by Saer and compilated under the title 'Dante', have some elements in common with Glosa -especially a promenade by three characters. Moreover, the nihilistic cosmovision at its end is written as a countervision of Paradiso; and its composition that puts the present in the perspective from the future is a reverse incarnation of Erich Auerbach's figurative realism. At the same time, the ephemeral epiphany of Glosa is clear through this intertextuality. Especially, the description of embers, adjacent to that epiphany, explains the core of Saer's poetics: narration as an ephemeral act of life driven by the reminiscence in the middle of the inhilibitic universe full of melancholy. I wrote an academic article in Spanish based on the paper mentioned above, and am looking for where to publish it. I also prepared the Japanese edition of Glosa, which will be published in 2022. 3. Adverture Base Actor (著著名・強選) (著者名・講選) (著書名行年月・講選年月) 美田和範												
自の形象へと昇華されており、メランコリーの虚無的な宇宙の中で記憶を原動力に儚く展開する生の営みとしての語り、というサエール 詩学の核心がげグロサルに観察されることを立証した。 上の報告に基づいた学術論文をスペイン語にて執筆し、現在投稿先を探している。また副産物として、『グロサ』日本語訳の準備を進 め、こちらは 2022 年刊行予定となっている。 2. 研究成果実績の概要(英訳) This research aims to clarify the principle of the creation of the Argentine writer Juan José Saer (1937–2005), through the intertextuality between his masterpiece Glosa (1986) and Dante. To accomplish the purpose, I obtained several materials on the author, Argentine or Latin American literature or Humanities in general, and tried a genetic approach as well as an analysis of the novel itself. The result of the investigation was published as an academic paper titled "The Presence of Dante in Juan José Saer's Glosa ", read at the 42nd Congress of Japan Association for Latin American Studies (JALAS). Its outline is as follows: Glosa has intertextualities with various writers from Ancient Times to Modern times, but the one with Dante has not been analyzed in detail. Nevertheless, the three poems written by Saer and compilated under the title 'Dante', have some elements in common with Glosa - especially a promenade by three characters. Moreover, the nihillistic cosmovision at its end is written as a countervision of Paradiso; and its composition that puts the present in the perspective from the future is a reverse incarnation of Erich Auerbach's figurative realism. At the same time, the ephemeral epiphany of Glosa is clear through this intertextuality. Especially, the description of embers, adjacent to that epiphany, explains the core of Saer's poetics: narration as an ephemeral act of life driven by the reminiscence in the middle of the nihilistic universe full of melancholy. I wrote an academic article in Spanish based on the paper mentioned above, and am looking for where to publish it. I also prepared the Japanese edition of Glosa, which will be published in 2022. 3. 本研究課題C 発表学術誌名 (著者・講題) (著者子心演題) 英田和範 2021 年 6 月 6 日												
ising several matrix and a several matrix and a several matrix and a several matrix and and a several matrix and and a several matrix and												
上の報告に基づいた学術論文をスペイン語にて執筆し、現在投稿先を探している。また副産物として、『グロサ』日本語訳の準備を進 め、こちらは 2022 年刊行予定となっている。 2.研究成果実績の概要(英訳) This research aims to clarify the principle of the creation of the Argentine writer Juan José Saer (1937–2005), through the intertextuality between his masterpiece Glosa (1986) and Dante. To accomplish the purpose, I obtained several materials on the author, Argentine or Latin American literature or Humanities in general, and tried a genetic approach as well as an analysis of the novel itself. The result of the investigation was published as an academic paper titled "The Presence of Dante in Juan José Saer's Glosa ", read at the 42nd Congress of Japan Association for Latin American Studies (JALAS). Its outline is as follows: Glosa has intertextualities with various writers from Ancient Times to Modern times, but the one with Dante has not been analyzed in detail. Nevertheless, the three poems written by Saer and compilated under the title 'Dante', have some elements in common with Glosa -especially a promenade by three characters. Moreover, the inibilistic cosmovision at its end is written as a countervision of Paradiso; and its composition that puts the present in the perspective from the future is a reverse incarnation of Erich Auerbach's figurative realism. At the same time, the ephemeral epiphany of Glosa is clear through this intertextuality. Especially, the description of embers, adjacent to that epiphany, explains the core of Saer's poetics: narration as an ephemeral act of life driven by the reminiscence in the middle of the inihilistic universe full of melancholy. I wrote an academic article in Spanish based on the paper mentioned above, and am looking for where to publish it. I also prepared the Japanese edition of Glosa, which will be published in 2022. 3. 本研究課題に関する発表 (著者・講題者) (著者名・講題) 第202. 3. 和研究課題に目本ラテンアメリカ学会定 2021 年 6 月 6 日				の中で記憶を原	割川に停て展開する土の呂の	としての詰り、と		<b>-</b>	-70			
2. 研究成果実績の概要(英訳)This research aims to clarify the principle of the creation of the Argentine writer Juan José Saer (1937-2005), through the intertextuality between his masterpiece Glosa (1986) and Dante. To accomplish the purpose, I obtained several materials on the author, Argentine or Latin American literature or Humanities in general, and tried a genetic approach as well as an analysis of the novel itself. The result of the investigation was published as an academic paper titled "The Presence of Dante in Juan José Saer's Glosa", read at the 42nd Congress of Japan Association for Latin American Studies (JALAS). Its outline is as follows: Glosa has intertextualities with various writers from Ancient Times to Modern times, but the one with Dante has not been analyzed in detail. Nevertheless, the three poems written by Saer and compilated under the title 'Dante', have some elements in common with Glosa -especially a promenade by three characters. Moreover, the nihilistic cosmovision at its end is written as a countervision of Paradiso; and its composition that puts the present in the perspective from the future is a reverse incarnation of Erich Auerbach's figurative realism. At the same time, the ephemeral epiphany of Glosa is clear through this intertextuality. Especially, the description of embers, adjacent to that epiphany, explains the core of Saer's poetics: narration as an ephemeral act of life driven by the reminiscence in the middle of the nihilistic universe full of melancholy. I wrote an academic article in Spanish based on the paper mentioned above, and am looking for where to publish it. I also prepared the Japanese edition of Glosa, which will be published in 2022.3. 本研究課題に関する発表 発表学術誌名 (著書名・演題)第名表表音氏名 (著書名・演題)発表課題名 (著書名・演題)第名表音行年月・講演年月)第42 回日本ラテンアメリカ学会定 2021 年 6 月 6 日				在投稿先を探し	ている。また副産物として、『	グロサ』日本語	訳の準	備を	進			
This research aims to clarify the principle of the creation of the Argentine writer Juan José Saer (1937-2005), through the intertextuality between his masterpiece Glosa (1986) and Dante. To accomplish the purpose, I obtained several materials on the author, Argentine or Latin American literature or Humanities in general, and tried a genetic approach as well as an analysis of the novel itself. The result of the investigation was published as an academic paper titled "The Presence of Dante in Juan José Saer's Glosa", read at the 42nd Congress of Japan Association for Latin American Studies (JALAS). Its outline is as follows: Glosa has intertextualities with various writers from Ancient Times to Modern times, but the one with Dante has not been analyzed in detail. Nevertheless, the three poems written by Saer and compilated under the title 'Dante', have some elements in common with Glosa –especially a promenade by three characters. Moreover, the nihilistic cosmovision at its end is written as a countervision of Paradiso; and its composition that puts the present in the perspective from the future is a reverse incarnation of Erich Auerbach's figurative realism. At the same time, the ephemeral epiphany of Glosa is clear through this intertextuality. Especially, the description of embers, adjacent to that epiphany, explains the core of Saer's poetics: narration as an ephemeral act of life driven by the reminiscence in the middle of the nihilistic universe full of melancholy. I wrote an academic article in Spanish based on the paper mentioned above, and am looking for where to publish it. I also prepared the Japanese edition of Glosa, which will be published in 2022.	め、こちらは 20	22 年刊行予定	となっている。									
intertextuality between his masterpiece Glosa (1986) and Dante. To accomplish the purpose, I obtained several materials on the author, Argentine or Latin American literature or Humanities in general, and tried a genetic approach as well as an analysis of the novel itself. The result of the investigation was published as an academic paper titled "The Presence of Dante in Juan José Saer's Glosa", read at the 42nd Congress of Japan Association for Latin American Studies (JALAS). Its outline is as follows: Glosa ", read at the 42nd Congress of Japan Association for Latin American Studies (JALAS). Its outline is as follows: Glosa has intertextualities with various writers from Ancient Times to Modern times, but the one with Dante has not been analyzed in detail. Nevertheless, the three poems written by Saer and compilated under the title 'Dante', have some elements in common with Glosa –especially a promenade by three characters. Moreover, the nihilistic cosmovision at its end is written as a countervision of Paradiso; and its composition that puts the present in the perspective from the future is a reverse incarnation of Erich Auerbach's figurative realism. At the same time, the ephemeral epiphany of Glosa is clear through this intertextuality. Especially, the description of embers, adjacent to that epiphany, explains the core of Saer's poetics: narration as an ephemeral act of life driven by the reminiscence in the middle of the nihilistic universe full of melancholy. I wrote an academic article in Spanish based on the paper mentioned above, and am looking for where to publish it. I also prepared the Japanese edition of Glosa, which will be published in 2022. 3. 本研究課題に関する発表 <u>Ra表aftcA</u> (著書A・講題) 浜田和範 フアン・ホセ・サエール『グロサ』に 第 42 回日本ラテンアメリカ学会定 2021 年 6 月 6 日			2.研究	成果実績の概要	要(英訳)							
author, Argentine or Latin American literature or Humanities in general, and tried a genetic approach as well as an analysis of the novel itself. The result of the investigation was published as an academic paper titled "The Presence of Dante in Juan José Saer's Glosa", read at the 42nd Congress of Japan Association for Latin American Studies (JALAS). Its outline is as follows: Glosa has intertextualities with various writers from Ancient Times to Modern times, but the one with Dante has not been analyzed in detail. Nevertheless, the three poems written by Saer and compilated under the title 'Dante', have some elements in common with Glosa – especially a promenade by three characters. Moreover, the nihilistic cosmovision at its end is written as a countervision of Paradiso; and its composition that puts the present in the perspective from the future is a reverse incarnation of Erich Auerbach's figurative realism. At the same time, the ephemeral epiphany of Glosa is clear through this intertextuality. Especially, the description of embers, adjacent to that epiphany, explains the core of Saer's poetics: narration as an ephemeral act of life driven by the reminiscence in the middle of the nihilistic universe full of melancholy. I wrote an academic article in Spanish based on the paper mentioned above, and am looking for where to publish it. I also prepared the Japanese edition of Glosa, which will be published in 2022. 3. 本研究課題に関する発表 <u>Ratafia</u> <u>Ratafia</u> <u>Ratafia</u> <u>7</u> アン・ホセ・サエール『グロサ』に 第 42 回日本ラテンアメリカ学会定 2021 年 6 月 6 日	This research	aims to clarify	y the principle of the creati	ion of the Arg	entine writer Juan José Sa	ner (1937-2005)	, throi	ıgh †	the			
novel itself. The result of the investigation was published as an academic paper titled "The Presence of Dante in Juan José Saer's Glosa", read at the 42nd Congress of Japan Association for Latin American Studies (JALAS). Its outline is as follows: Glosa has intertextualities with various writers from Ancient Times to Modern times, but the one with Dante has not been analyzed in detail. Nevertheless, the three poems written by Saer and compilated under the title 'Dante', have some elements in common with Glosa – especially a promenade by three characters. Moreover, the nihilistic cosmovision at its end is written as a countervision of Paradiso; and its composition that puts the present in the perspective from the future is a reverse incarnation of Erich Auerbach's figurative realism. At the same time, the ephemeral epiphany of Glosa is clear through this intertextuality. Especially, the description of embers, adjacent to that epiphany, explains the core of Saer's poetics: narration as an ephemeral act of life driven by the reminiscence in the middle of the nihilistic universe full of melancholy. I wrote an academic article in Spanish based on the paper mentioned above, and am looking for where to publish it. I also prepared the Japanese edition of Glosa, which will be published in 2022. 3. 本研究課題に関する発表 <u>Ratate</u> <u>Ratate</u> <u>Ratate</u> <u>Ratate</u> <u>Ratate</u> <u>Ratate</u> <u>Ratate</u> <u>Ratate</u> <u>Ratate</u> <u>Ratate</u> <u>Ratate</u> <u>Ratate</u> <u>Ratate</u> <u>Ratate</u> <u>Ratate</u> <u>Ratate</u> <u>Ratate</u> <u>Ratate</u> <u>Ratate</u> <u>Ratate</u> <u>Ratate</u> <u>Ratate</u> <u>Ratate</u> <u>Ratate</u> <u>Ratate</u> <u>Ratate</u> <u>Ratate</u> <u>Ratate</u> <u>Ratate</u> <u>Ratate</u> <u>Ratate</u> <u>Ratate</u> <u>Ratate</u> <u>Ratate</u> <u>Ratate</u> <u>Ratate</u> <u>Ratate</u> <u>Ratate</u> <u>Ratate</u> <u>Ratate</u> <u>Ratate</u> <u>Ratate</u> <u>Ratate</u> <u>Ratate</u> <u>Ratate</u> <u>Ratate</u> <u>Ratate</u> <u>Ratate</u> <u>Ratate</u> <u>Ratate</u> <u>Ratate</u> <u>Ratate</u> <u>Ratate</u> <u>Ratate</u> <u>Ratate</u> <u>Ratate</u> <u>Ratate</u> <u>Ratate</u> <u>Ratate</u> <u>Ratate</u> <u>Ratate</u> <u>Ratate</u> <u>Ratate</u> <u>Ratate</u> <u>Ratate</u> <u>Ratate</u> <u>Ratate</u> <u>Ratate</u> <u>Ratate</u> <u>Ratate</u> <u>Ratate</u> <u>Ratate</u>	-											
Glosa <sup>"</sup> , read at the 42nd Congress of Japan Association for Latin American Studies (JALAS). Its outline is as follows: Glosa has intertextualities with various writers from Ancient Times to Modern times, but the one with Dante has not been analyzed in detail. Nevertheless, the three poems written by Saer and compilated under the title 'Dante', have some elements in common with Glosa -especially a promenade by three characters. Moreover, the nihilistic cosmovision at its end is written as a countervision of Paradiso; and its composition that puts the present in the perspective from the future is a reverse incarnation of Erich Auerbach's figurative realism. At the same time, the ephemeral epiphany of Glosa is clear through this intertextuality. Especially, the description of embers, adjacent to that epiphany, explains the core of Saer's poetics: narration as an ephemeral act of life driven by the reminiscence in the middle of the nihilistic universe full of melancholy. I wrote an academic article in Spanish based on the paper mentioned above, and am looking for where to publish it. I also prepared the Japanese edition of Glosa, which will be published in 2022. 3. 本研究課題に関する発表 <u>Razef術誌名 (著書名・講演者)</u> 浜田和範 フアン・ホセ・サエール『グロサ』に 第 42 回日本ラテンアメリカ学会定 2021 年 6 月 6 日												
Glosa has intertextualities with various writers from Ancient Times to Modern times, but the one with Dante has not been analyzed in detail. Nevertheless, the three poems written by Saer and compilated under the title 'Dante', have some elements in common with Glosa -especially a promenade by three characters. Moreover, the nihilistic cosmovision at its end is written as a countervision of Paradiso; and its composition that puts the present in the perspective from the future is a reverse incarnation of Erich Auerbach's figurative realism. At the same time, the ephemeral epiphany of Glosa is clear through this intertextuality. Especially, the description of embers, adjacent to that epiphany, explains the core of Saer's poetics: narration as an ephemeral act of life driven by the reminiscence in the middle of the nihilistic universe full of melancholy. I wrote an academic article in Spanish based on the paper mentioned above, and am looking for where to publish it. I also prepared the Japanese edition of Glosa, which will be published in 2022.Startfree Restaute Restaute Restaute Restaute RestauteStartfree Restaute Restaute Prime RestauteStartfree Restaute RestauteMathematical ActionRestaute RestauteRestaute RestauteStartfree Restaute RestauteRestauteRestaute RestauteRestaute RestauteStartfree Restaute RestauteRestauteRestaute RestauteRestaute RestauteStartfree Restaute RestauteRestauteRestaute RestauteRestaute RestauteStartfree Restaute RestauteRestauteRestaute RestauteRestaute RestauteStartfree Restaute RestauteRestauteRestaute RestauteRestaute RestauteStartfree Restaute <br< td=""><td></td><td colspan="9"></td></br<>												
detail. Nevertheless, the three poems written by Saer and compilated under the title 'Dante', have some elements in common with Glosa -especially a promenade by three characters. Moreover, the nihilistic cosmovision at its end is written as a countervision of Paradiso; and its composition that puts the present in the perspective from the future is a reverse incarnation of Erich Auerbach's figurative realism. At the same time, the ephemeral epiphany of Glosa is clear through this intertextuality. Especially, the description of embers, adjacent to that epiphany, explains the core of Saer's poetics: narration as an ephemeral act of life driven by the reminiscence in the middle of the nihilistic universe full of melancholy. I wrote an academic article in Spanish based on the paper mentioned above, and am looking for where to publish it. I also prepared the Japanese edition of Glosa, which will be published in 2022. 3. 本研究課題に関する発表 <u>Ra</u> 表者氏名 (著者・講演者) 浜田和範 フアン・ホセ・サエール『グロサ』に 第 42 回日本ラテンアメリカ学会定 2021 年 6 月 6 日												
Paradiso; and its composition that puts the present in the perspective from the future is a reverse incarnation of Erich Auerbach's figurative realism. At the same time, the ephemeral epiphany of Glosa is clear through this intertextuality. Especially, the description of embers, adjacent to that epiphany, explains the core of Saer's poetics: narration as an ephemeral act of life driven by the reminiscence in the middle of the nihilistic universe full of melancholy. I wrote an academic article in Spanish based on the paper mentioned above, and am looking for where to publish it. I also prepared the Japanese edition of Glosa, which will be published in 2022. 3. 本研究課題に関する発表 発表者氏名 (著者・講演者) 浜田和範 フアン・ホセ・サエール『グロサ』に 第 42 回日本ラテンアメリカ学会定 2021 年 6 月 6 日												
figurative realism. At the same time, the ephemeral epiphany of Glosa is clear through this intertextuality. Especially, the description of embers, adjacent to that epiphany, explains the core of Saer's poetics: narration as an ephemeral act of life driven by the reminiscence in the middle of the nihilistic universe full of melancholy. I wrote an academic article in Spanish based on the paper mentioned above, and am looking for where to publish it. I also prepared the Japanese edition of Glosa, which will be published in 2022. 3. 本研究課題に関する発表 発表者氏名 (著者・講演者) 浜田和範 アアン・ホセ・サエール『グロサ』に 第 42 回日本ラテンアメリカ学会定 2021 年 6 月 6 日	Glosa -especially a promenade by three characters. Moreover, the nihilistic cosmovision at its end is written as a countervision of											
of embers, adjacent to that epiphany, explains the core of Saer's poetics: narration as an ephemeral act of life driven by the reminiscence in the middle of the nihilistic universe full of melancholy. I wrote an academic article in Spanish based on the paper mentioned above, and am looking for where to publish it. I also prepared the Japanese edition of Glosa, which will be published in 2022. 3. 本研究課題に関する発表 発表者氏名 (著者・講演者) 浜田和範 クアン・ホセ・サエール『グロサ』に 第 42 回日本ラテンアメリカ学会定 2021 年 6 月 6 日												
reminiscence in the middle of the nihilistic universe full of melancholy. I wrote an academic article in Spanish based on the paper mentioned above, and am looking for where to publish it. I also prepared the Japanese edition of Glosa, which will be published in 2022. 3. 本研究課題に関する発表 発表者氏名 (著者・講演者) (著書名・演題) (著書名行所・講演学会) (著書発行年月 (著書発行年月・講演年月) 浜田和範 フアン・ホセ・サエール『グロサ』に 第 42 回日本ラテンアメリカ学会定 2021 年 6 月 6 日												
mentioned above, and am looking for where to publish it. I also prepared the Japanese edition of Glosa, which will be published in 2022. 3. 本研究課題に関する発表  発表者氏名 (著者・講演者) (著書名・演題) 浜田和範 フアン・ホセ・サエール『グロサ』に 第 42 回日本ラテンアメリカ学会定 2021 年 6 月 6 日												
3.本研究課題に関する発表         発表者氏名 (著者・講演者)       発表課題名 (著書名・演題)       発表学術誌名 (著書発行所・講演学会)       学術誌発行年月 (著書発行年月・講演年月)         浜田和範       フアン・ホセ・サエール『グロサ』に       第 42 回日本ラテンアメリカ学会定       2021 年 6 月 6 日	mentioned above, and am looking for where to publish it. I also prepared the Japanese edition of Glosa, which will be published in											
発表者氏名 (著者・講演者)発表課題名 (著書名・演題)発表学術誌名 (著書発行所・講演学会)学術誌発行年月 (著書発行年月・講演年月)浜田和範フアン・ホセ・サエール『グロサ』に第 42 回日本ラテンアメリカ学会定2021 年 6 月 6 日			·		-		-					
浜田和範 フアン・ホセ・サエール『グロサ』に 第 42 回日本ラテンアメリカ学会定 2021 年 6 月 6 日			3.本研	研究課題に関す	-る発表							
浜田和範 フアン・ホセ・サエール『グロサ』に 第 42 回日本ラテンアメリカ学会定 2021 年 6 月 6 日	発表 (著者・	手氏名 講演者)	発表課題名 (著書名・演題)	(‡	発表学術誌名 皆書発行所・講演学会)	学術誌発 (著書発行年月	行年」 ・講社	] 寅年/	月)			
				サ』に 第 42 [	回日本ラテンアメリカ学会定							